

南北朝時代における中国撰述経典の成立について

水野荘平

隋・費長房撰『歴代三宝紀』は、『出三蔵記集』や『法経録』において失訳と分類された経典（即ち南北朝時代に成立した中国撰述経典）の多くに対し、「経典の分類ごとに訳者を割り振る」という方法によって、新たに訳者を定めている。この全く根拠の無い訳者の割り振りにより、『歴代三宝紀』は特に経録の部に関して、その資料的価値をほとんど認められていないのが現状である。

しかしながら、『歴代三宝紀』以前の経録において失訳とされた経典が、『歴代三宝紀』においては複数の訳者名が記載されている場合、それは「経典の分類ごとに訳者を割り振る」という方法以外の、何らかの典拠によって訳者が定められているわけであるから、その経典の成立に関しては特別な注意が必要である。

例えば、五世紀後半に成立した偽経として知られる『仁王般若経』について見ると、『歴代三宝紀』では法護・鳩摩羅什・真諦の三訳があるとされ、且つ、一卷とする記述と二巻とする記述とが混在している。即ち、現行の二巻本の他に、一卷本も存在した可能性があるわけである。

実際に『仁王般若経』の各品の内容について検討すると、前半にあたる第一巻の序品第一から二諦品第四までは、複数の菩薩の階位説や二諦説が雑多に記述されて統一性がないものの、偽経説の直接的な論拠となり得る箇所は見出せない。また二諦品第四の最後で「此の経を名づけて仁王問般若波羅蜜経と為す」として経題が示されており、序品から二諦品までの第一巻だけで、形式としては一つの経典として完結している。これに対して、後半第二巻の護国品第五から囑累品第八まででは、護国の功德が強調されると共に道教系の用語が頻出し、また受持品第七において第一巻に記述される複数の雑多な菩薩階位説が整理統合された階位説が示されている。即ち、後半第二巻では偽経説の直接的な論拠となる箇所が集中して見出されるのである。

従って、『仁王般若経』に、その経題が付けられた何らかの小部の梵本が存在したのかは不明であるが、少なくとも前半の第一巻は、諸経典の般若思想をまとめた抄経に近い性格を持っており、中国編集経典と呼ぶべきものである。これに対して後半の第二巻は随所に中国固有の思想が混入しており、文字通り中国撰述経典と呼ぶべきものである。前半の第一巻は本来一卷本であり、後に増広を加えられて、現行の二巻本になったと考えられる。

『仁王般若経』以外の中国撰述経典であっても、『歴代三宝紀』以降の経録において複数の訳者名や巻数が記載されている場合、増広など何らかの改訂が加えられた可能性があり、その成立過程については改めて十分な検討が必要であろう。

キーワード：『仁王般若経』・『歴代三宝紀』・中国編集経典